



保育の動画を視聴し多様な幼児の見方を受け止め合う

日々の記録から翌日の保育を工夫する

初任者の授業観察、授業研究の取組の心構えを学ぶ



小学校・中学校1年次研修



保育訪問



幼稚園・こども園3年次研修

グループで自己の課題を出し合い発表 今後の学習指導に活かす



小学校・中学校2年次研修

ベランダでの栽培活動（大きく育った大根の収穫）



適応教室（白鳥教室）

国語（書写）



園・学校の支援につながる研究報告と意見交換



所内研究

教科書展示



情報資料室(教育情報資料・教科書センター)

教育研究所における主な事業

目 次

- 所長挨拶 「千代田の鼓動」 …… (1)
- 1. 教育研究所の所内研究 …… (2)
- 2. 教育課題調査研究 …… (2)
- 3. 幼児教育 …… (3)
- 4. 若手教員育成研修1年次 …… (4)
- 5. 若手教員育成研修2・3年次、
中堅教諭等資質向上研修 …… (5)
- 6. 学校経営支援 …… (6)
- 7. いじめ・不登校等への支援 …… (6)
白鳥教室（適応指導） …… (7)
- 8. 教育情報資料及び教科書 …… (7)



千代田区の鼓動

千代田区立教育研究所
所 長 佐藤 友信

「予測困難な時代」であり、新型コロナウイルス感染症により一層先行き不透明となる中、私たち一人一人、そして社会全体が、答えのない問いにどう立ち向かうのかが問われています。

そんな中、今年 1 月、文部科学省のホームページに「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～」の答申が掲載されました。未来の教育の方向性ととともに、日本の教育の現状に至るまでの分析が表されていました。

- 我が国の教師は、子供たちの主体的な学びや、学級やグループの中での協働的な学びを展開することによって、自立した個人の育成に尽力してきた。その一方で、我が国の経済発展を支えるために、「みんなと同じことができる」「言われたことを言われたとおりにできる」上質で均等な労働者の育成が高度経済成長期までの社会の要請として学校教育に求められてきた中で、「正解（知識）の暗記」の比重が大きくなり、「自ら課題を見つけ、それを解決する力」を育成するため、他者と協働し、自ら考え抜く学びが十分なされていないのではないかという指摘もある。
- 学校では「みんなで同じことを、同じように」を過度に要求する面が見られ、学校生活においても「同調圧力」を感じる子供が増えていったという指摘もある。社会の多様化が進み、画一的・同調主義的な学校文化が顕在化しやすくなった面もあるが、このことが結果としていじめなどの問題や生きづらさをもたらし、非合理的な精神論や努力主義、詰め込み教育等との間で負の循環が生じかねないということや、保護者や教師も同調圧力の下にあるという指摘もある。
- 従来の社会構造の中で行われてきた「正解主義」や「同調圧力」への偏りから脱却し、本来の日本型学校教育の持つ、授業において子供たちの思考を深める「発問」を重視してきたことや、子供一人一人の多様性と向き合いながら一つのチーム（目標を共有し活動を共に行う集団）としての学びに高めていく、という強みを最大限に生かしていくことが重要である。

私は自分の心臓のドクンという音を感じました。コロナ禍の中、千代田区の園・学校は、熱意をつないでつないで努力をしてきた、その方向性と何ら違いがないものであったからです。

今、目の前にある現実を見て、教員と子どもたちは感じているはずです。

人の人生に一生懸命になれることの素晴らしさを
物事を変える、育てるためには辛抱強さが必要なことを
自分を変えられる人がこの世界を変えられることを
目に見えないものが、この世で最も尊いことを
何かに挑戦していく経験が私たちの心を強くしてくれることを
失敗を恐れてはいけないことを
「憧れ」は大切な感情であることを
「これでいい」じゃなく「これがいい！」と叫びたいことを
努力は「夢中」に勝てないことを



教育研究所は園・学校の応援団です。園・学校は世界で一番、素晴らしい場所です。それは過去も現在も未来も変わることなく、千代田区の教育は鼓動を打ち続けます。未来を担う子どもたちの伴走者であるために。

1 教育研究所の所内研究

本研究所員の資質・能力の向上を目指し、各自がテーマを決め研究を進めています。

今年度も、若手教員研修の指導、助言に資するために、学習指導要領に関する論文や専門誌の記事等を資料として発表し、全所員が意見交換を通して学び合いました。園・学校教育現場の支援につながる所内研修として、研鑽を積んでいます。

| 月 日 | テーマ | 概要 |
|--------|-----------------------------------|---|
| 6月2日 | 学校・家庭と研究所の連携で育てる「豊かに関わりあう心」 | ○思いやりの心を育てるコツ ○「考え、議論する道徳科」を体験する模擬授業・演習 |
| 7月21日 | 学校段階等間の接続～スタートカリキュラムのデザインとマネジメント～ | ○幼児期から学童期の子どもの成長と就学前教育 ○生活科を中心とした小学校教育のよりよい連携・接続 |
| 8月26日 | 特別活動の授業と評価 | ○「OECD 学びのコンパス 2030」に準じた、話し合い活動における3つの資質・能力を育成するための指導方法 |
| 8月27日 | 平成30年6月に起こった新幹線殺傷事件の背景を考える | ○加害者の生い立ちや育った環境から事件を捉える ○氷山モデルと生活モデル |
| 9月14日 | 集団の中で困難さを感じる子どもを支える園の役割 | ○事例を通し、幼児の気持ちの受け止め方や理解を深め教師の援助や園の役割を学ぶ |
| 10月15日 | 「プログラミングの体験」「読書活動の充実」の一考察 | ○未来を創るプログラミングは読書から生まれる ○公教育の本義を問う（コロナ後への懸念） |
| 11月12日 | 語彙を豊かに ～教師の意図的な働きかけを通して～ | ○発達段階に応じた語彙感覚・語彙能力の確実な育成 ○語彙の「量と質」両面の充実、語句の質の向上 |
| 12月4日 | ソーシャルスキルトレーニング（SST）の理論と実践 | ○発達に課題のある子どもに必要なとされる基本的スキル ○SST の意義、SST の具体的な流れの理解及び体験 |
| 1月18日 | つなぐ つなげる 千代田の教育2021 | ○授業が教師の生命線、新しい価値観を生み出す意欲 ○子どもから学び、子どもに感動する教師 |

【担当】 教育研究所 長田真理子（記） 木暮 温

2 教育課題調査研究

研究主題として『これからの社会を自ら判断し生き抜く児童・生徒の育成』を掲げて、3年計画のまとめの年になりました。

年度当初のオンライン部会やウェブ授業、千代田 GIGA スクール構想等を踏まえサブテーマを「ICTを効果的に利活用した主体的・対話的で深い学びにする授業づくり」と設定し、これを受けて、4月・5月の新型コロナウイルス感染症拡大防止対策の臨時休業期間における学習課題やオンライン学習等について、児童・生徒と教員を対象に意識調査も実施しました。調査で得られた児童・生徒661名分、教員116名分のデータを基に分析・まとめを行い、学校再開後の授業改善に生かすよう努めました。また、意識調査を踏まえつつ、二つの分科会に分かれて授業研究を行いました。

○A 分科会 テーマ「今の時代を意識した対話的な学びにする授業づくり」

授業実践 10月 6日 小学校6年 社会 「戦国の世から天下統一へ」
PCタブレットソフトの「スカイメニュークラス」を活用した意見の交流、子ども同士の協働作業、資料から読み取った先哲の考え方等に焦点化して検証しました。

○B 分科会 テーマ「主体的に課題を見出し、解決しようとする児童・生徒の育成」

授業実践 11月24日 中学校3年 数学 「三平方の定理」
子どもの実生活に基づいた導入、PCタブレットを使った図形操作、グループの話し合いと全体共有等に焦点化して検証しました。

2月15日には、本部会の委員が授業者となって授業公開・報告会を行い、講師の先生から、たいへん意義深い調査研究であったと講評をいただきました。作成したリーフレットを活用して各校の教育実践に生かされることを願っています。

【担当】 指導課 内山 宝 指導主事 教育研究所 木暮 温（記） 額賀 聡

3 幼児教育（保育訪問及び3年次研修）

（1）保育訪問（◆臨時保育訪問（6月） ◆各園1回～2回 合計16回）

6月の登園開始後、臨時保育訪問を実施。各園の新型コロナウイルス感染症拡大防止対策として、トイレや手洗い場のソーシャルディスタンス表示の工夫、遊具の消毒等、取組を紹介しました。また、初任者については学級経営等の様子を聞き取りました。

○通常の保育訪問

- ・事前に園から提出された課題を基に、保育観察、協議会を実施
- ・保育の様子を写真や動画で撮影し、幼児の姿から環境や援助についての話し合い
- ・幼児の気持ちやどのようなことを経験していたかを視点に協議し、若手教員等の今後の援助や環境構成の工夫

＜例＞A園保育訪問 園の課題『環境の工夫と若手教員育成』

① 1学期保育観察（7月）

＜若手教員の課題＞幼児の遊びが明日へも続くような、言葉かけや環境構成が課題

＜協議会＞撮影した保育の様子を動画で客観的に見て、遊びの中で幼児が楽しんでいることは何か、明日の遊びに期待できるような片付け時の援助の工夫等について振り返りました。

② 2学期保育観察（11月）

＜若手教員の成果＞教師が幼児一人一人の楽しむ姿を具体的な言葉で認める姿が多く、幼児との信頼関係が増し、見通しをもって保育をしていることが伝わってきました。

＜協議会＞若手教員の保育の動画を視聴しながら皆で意見を出し合い、多様な考え方、見方があることを学び、若手教員は担任として、幼児の実態に合わせ援助を工夫していたことを皆に伝えながら多様な意見を受け止めていました。

◆まとめ

非常勤講師や支援員も参加し、同じ保育場面を皆で共有し、意見を聴き合う機会の一つになりました。A園の訪問を通し、園全体で若手教員を支える組織力が若手教員の成長につながると感じ、多様な立場の人がリスpektし合い、意見を言える環境が大切だと考えます。

【担当】 指導課 牧田裕一 指導主事 教育研究所 大関邦子（記） 額賀 聡

（2）若手教員育成研修3年次（◆3名の1、2学期研究保育と先輩教員の保育観察 合計9回）

「1日の保育を振り返り、次の保育の指導に活かす能力を身につけよう」～日の記録から～というテーマで、研修生が課題と感じている保育場面を中心に観察、協議会を行いました。保育の動画を見ながら、幼児理解や援助の在り方を探り、どのように記録すると次の日の指導に活かせるのか、今日の遊びや経験したことが幼稚園教育要領に示された「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」とどうつながるか等、研修生自身が振り返れるよう助言しました。

＜例＞B園の研修

① 先輩教員の保育から学ぶ（11月中旬）

研修生は『好きな遊びの中で子どもの気持ちを受け止め、幼児と具体的にどのような対話をしているのかを学びたい』という目的をもちました。保育観察を通して、教員も場に入ってなりきりながら幼児の思いを聞き取り、幼児が自分なりに考え動けるような援助の仕方を学びました。

② 研究保育（11月下旬）

研修生は①で学んだ事を活かし、幼児が楽しんでいたことを捉え言葉かけやもの提示を工夫しました。協議会では日の記録から教師が援助を迷っている遊び場面をとりあげ、どのように遊びを見取るかを視点として、話し合いました。動画を通して幼児のしたかったことは何かを丁寧に振り返り、幼児理解を深めながら明日はどう援助していくのかを考え、記録につなげられるよう助言しました。

◆まとめ

日の記録は、教師自身が幼児をどう理解しているのかを知ると同時に、自分自身に気付くことができるという保育の資質向上に欠かせない営みです。今後も記録の重要性を理解し、記録を通して、明日の援助につなげられるよう期待しています。

【担当】 指導課 牧田裕一 指導主事 教育研究所 大関邦子（記） 宇田川嘉一

4 若手教員育成研修 1 年次

「東京都若手教員育成研修実施要項・実施細目」等に基づき、区立学校(園)に配属されている初任者及び新規採用教員に対し、公立学校の教員として必要な心構えと基礎的・基本的な事項に関する研修の内、本研究所では研究所等における半日研修と授業における研修を行いました。

受講者は幼稚園・こども園3名、小学校8名(特別支援3名)、中学校2名、計13名(うち期限付1名)。

(1) 校外における研修(◆研究所の教育研究専門員が以下の講義や授業の講師を務めました)

| 回 | 月 日 | 概 要 | |
|-------------|----------------------------|--|---|
| 第1回 | 4月27日～ 5月7日 | 「新任教員としての心構え」について動画配信 オンライン研修(5月7日) | |
| 第2回 | 5月18日～ 25日 | 「主任教諭と教諭の講話」動画配信 「講話から学ぶこと」オンライン研修(5月25日) | |
| 第3回 | 6月11日 13:30～16:30 | 「いじめ防止、体罰の禁止・SOSの出し方に関する教育について」 *グループで協議し発表を通して、いじめのない学級づくりのための指導について主体的に学びました。 |  |
| 第4回 | 7月7日 13:30～16:30 | 「学級経営の意義と指導 学級づくりの実際」 *自分の考えを図や絵にして伝える力を高めました。 | |
| 第5回 | 8月7日 13:30～16:30 | 「人権課題の推進」「学校教育と教員の在り方」「不登校、自殺防止の取組」 *自分が配慮している具体例を紹介し合ったり、資料を基に教員の「働き方」についてグループで話し合ったりすることで、人権や働き方についての理解を深めました。 | |
| 夏季集中研修 | 8月19日 20日 8:15～16:45 | 「子どもの気持ち 子どもの育ち」(幼児教育)「よりよい授業づくりをするために」 *課題に真剣に取り組み、ブレインストーミングやKJ法等を使ってアイデア出したり、収束させたりしながら、解決の方法を導き出し、課題解決の力を高めました。 | |
| 第6回 | 10月22日 13:30～16:30 | 「生活指導の充実」と「問題行動への対応」 *研修生は、先輩から学ぶ「7つの実践」の中から、取り組んでいきたい事柄を考え、明日からの実践につなげました。 |  |
| 第7回 授業研究 | 11月5日 13:20～16:30 | 小学校2年 算数「かけ算」 *「授業研究の取組の心構え」を算数科学習指導要領の改訂ポイントを通して、実践的に学びました。 | |
| 第8回 研究保育 | 11月26日 12:30～16:30 | こども園 3歳児 *「就学前教育と小学校教育の円滑な接続のための幼児理解」について理解を深めました。 | |
| 第9回 授業研究 | 1月14日 13:00～16:30 | 中学校1年 美術「夢をつかむ手のカタチ」 *「深い学び」について中学校の授業実践を通して理解を深めました。 | |
| 第10回 | 1月28日 13:30～16:30 | 「これからの教員に求められる力」「学習指導と評価」 *今年度の研修を振り返り、来年度の取組への意欲を高めました。 | |

(2) 校内における授業に関する研修

1学期は、教育研究専門員が各研修生の学校を訪問し、教師と子どもの関わり方や学級づくりについて助言しました。2、3学期は、教科の授業を中心に、学習指導案の書き方や教材研究等の事前指導を行い、授業参観の後、協議会を通して学習指導上の課題を明らかにしました。研修生が自分の長所を伸ばし、課題解決に向き合い授業力を身に付けるよう期待しています。【担当】指導課 戸栗大貴 指導主事 教育研究所 眞壁玲子(記) 額賀 聡 長田真理子

5 若手教員育成研修2・3年次、中堅教諭等資質向上研修

(1) 2年次研修

教育研究所における半日研修を3回実施しました。第1回(5/22)は、「学習指導の理論と実践」をテーマとした先輩教員による対話形式のオンライン講話を視聴しました。

それを受けて、第2回(8/3)では、研修生(18名)自身が自己の課題を設定し、単元の評価規準や指導観等を詳細に書き込んだ学習指導案を作成し、授業研究に向かいました。グループ協議では、2学期の学習指導で大切にしたいこととして、①言語活動の充実(3人で話し合い、話型、ICTを使った交流、経験と想像をつなげる)、②体験活動の充実(体験を通して考えを広げる、経験と想像をつなげる、PC一人一台)、③動機付けの重視(既習を生かす、身近な題材を取り上げる、スモールステップ、新たな発見)、④評価の重視(評価規準を精選して活動内容を明確にする、具体的な例を示し褒める)、⑤柔軟なグループワークの実施(児童の興味をひく話題、自分事として捉えられる発問)等があげられました。

第3回(2/25)では、各自が授業を振り返り、単元全体の授業記録をもとに成果と課題を整理し、資料をまとめ上げて発表しました。

その他、各回には、特別支援教育、主権者教育、特別活動の講義があり、どのグループ協議においても活発な意見交換がなされました。3年次に向けて、さらなる授業力の向上に期待しています。

【担当】指導課 戸栗大貴 指導主事 教育研究所 長田真理子(記) 木暮 温

(2) 3年次研修

半日研修〔全2回〕を通して「外部との連携・折衝力」、「学校運営力・組織貢献力」等の課題解決力の伸長を目指して実施しました。

第1回(8/4)では、『不登校、虐待を中心にした学校と関係機関との連携』をテーマに、講師である児童家庭支援センター家庭相談係長、同発達支援係長と研修生(7名)がワークショップ形式でディスカッションを行いました。日頃から児童・生徒の様子を観察し保護者と関わる中で、小さな変化を見逃さずに、早期発見と適切な対応に努めることを学びました。

第2回(2/12)は、佐藤友信所長より『学校運営の参画と組織貢献』について講義を受けました。その後、若手教員研修の集大成として、自己の授業実践をもとに「後輩教員へ授業力向上について伝えていきたいこと」をまとめ10分間のプレゼンテーションを行いました。また、3学期に行った授業研究を基に、日々の授業において授業の目標の達成と適切な評価、言語活動の充実に向けた授業展開、3つの資質能力の育成等、授業改善を通して「授業力」の充実を図ってきました。

来年度からは、ミドルリーダーとして若手教員に対する的確な助言をし課題解決の拡充を図り、大いに学校運営に参画し組織貢献できるように期待しています。

【担当】指導課 戸栗大貴 指導主事 教育研究所 長田真理子(記) 木暮 温

(3) 中堅教諭等資質向上研修

本研修は、令和元年度より指導課の主管轄となり、指導課からの依頼を受け、研究所では4回の授業研究を担当しました。今年度の授業研究に関わる受講者は小学校主任教諭2名で、学校運営の資質向上を目指し、中堅教諭としての実践力を高めることに主眼を置きました。

- ・授業研究① 6月12日 指導教諭による講義「新しい生活様式に合わせた理科指導」
- ・授業研究② 9月11日 小学校2年 算数「ひっ算のしかたを考えよう」
- ・授業研究③-1 10月7日 2年次教員の授業 小学校1年 国語を参観しての指導
- ・授業研究③-2 10月12日 2年次教員の授業 小学校3年 体育を参観しての指導
- ・授業研究④ 10月29日 小学校5年 道徳「差別や偏見の心と向き合う」

このうち、授業研究②と④においては、受講者のうち授業者は指導案作成から授業実践の過程で「自らの授業力」を、もう一方の受講者は研究協議会の立案と司会を受けもち、「校内において授業研究を推進していく力」を、それぞれ向上させることができました。

授業研究③においては、自校の若手教員の授業を参観して、教材研究・授業展開・発問等についての助言や支援を行うことにより、「若手教員に対する指導力」を培いました。

学校運営の一翼を担うミドルリーダーとしての自覚と意識をもって、本研修での学びを各校で生かしていくことを期待しています。

【担当】指導課 塚田恭平 指導主事 教育研究所 木暮 温(記)

6 学校経営支援

(1) 経験者教員等への働きかけ

特に、経験の浅い教員や本区に異動してきたばかりの教員にとっては、年間を通じて計画された研修会だけでは、自身の課題解決に向けた道筋をつかみにくい場合も考えられます。そのような時には、各校園長からの依頼に基づき、状況を勘案しながら、教育研究所の教育研究専門員が授業観察や個別の懇談等を通して、該当教員の支援に当たることができます。

これまでに相談を受けた事例で多かったのは、「幼児・児童・生徒に的確な指示や声掛けができない」「授業中に子どもたちがざわざわしてしまって、思うように授業が進まない」など、授業中の指導についての相談です。このような相談には、教員が冷静に自身の課題を整理し問題点への気づきを促すことができるように、教育研究専門員と指導等を振り返る場をつくる対応をしています。

授業観察と懇談を重ねることによって、自身の課題解決へのヒントを見出す機会が得られたのではないかと考えています。また、それは、幼児・児童・生徒に話を聞く力をつけることや教員の指示を簡潔にすること等、授業を手掛ける際の基礎・基本を整理し、該当教員が学び直すことにつながったと感じています。

(2) 校園長会・副校園長会との連携

教育研究所の諸活動を円滑に進めるためには、各校園からのご理解とご協力が不可欠であることは言うまでもありません。そのため、各会合には担当の所員が出席し、各校園の教育活動や幼児・児童・生徒の様子などへの理解を深めるように努めています。

(3) 産育休代替教員への働きかけ

本区では12名（令和2年6月1日現在）が各校園の一員として活躍しています。本年度は派遣依頼がありませんでしたが、各校園長の判断・要請の下、教員自身の授業や学級づくりのヒントをともに見出ししていきたいと考えています。

【担当】 教育研究所 宇田川嘉一（記） 木暮 温 額賀 聡 眞壁玲子

7 いじめ・不登校等への支援

(1) スクールライフサポーター(SLS)連絡会

第1回連絡会は7月10日に研修室で行いました。各校SLS間の情報交換会では、活発な意見や質問が出され、あっという間に予定時刻を過ぎてしまうほどの、熱気にあふれた時間となりました。今年度は新しいSLSが加わり、ベテランの先輩SLSがアドバイスをする頼もしい光景も見られました。また、今年度も10月から11月にかけて、学校へのSLS訪問を通じ各SLSの活動ぶりを見学しながら、現場で奮闘するSLSを応援し、その独自の取組を後押しすることができたように思います。そして、管理職を交えた三者面談では、SLSの存在意義について改めて認識を深めてもらい、管理職からも応援されている存在であることを各SLSが感じ取ってもらえたことでしょうか。今年度より配置の新しいSLSにとっては活動に対する戸惑いや不安もあったように思います。3月に予定する第3回連絡会においては、先輩SLSとの交流や助言を得る機会とし、来年度に向け思いを新たにできればと考えています。

(2) スクールソーシャルワーカー(SSW)の活動

昨年度終盤からの長期にわたる一斉休校や分散登校によって、子どもの姿が見えづらくなってしまったこと、生活環境が一変してしまったことに焦りと不安を覚えるとともに、子どもの福祉のために、学校が果たしている大切な機能を改めて思い知る機会ともなりました。命と健康を守る観点からの行動制限とは言え、子ども自身の気持ちや意見を表明することがより困難になってしまった状況下、かかる影響を注意深く見守っていく必要性を感じ、SSWとして何ができるのか模索する日々だったように思います。今年度は、適宜実施した学校訪問による情報収集はもとより、校内で行われる定例会議への参加、ケース会議への参加等を通じて、子どもやその保護者への直接的なかかわりも増えてきました。傷つきやすく、脆弱さも抱えているがゆえに、大人の思い込みではなく、真に子どもにとっての最善の利益につながるよう寄り添い、耳を傾け、権利の主体として尊重されるような環境づくりに努めたいと思います。

【担当】 教育研究所 SSW 天農秀樹（記） 眞壁玲子

(3) 白鳥教室（適応指導教室）

白鳥教室は、様々な理由で登校できない子どもが、安心して過ごせる「心の居場所」です。学校に籍を置きながら通うことができ、臨床心理の資格を有する指導員が保護者や在籍校と連携して、子どもの意欲を尊重しながら指導や支援を行っています。

今年度は、1時間目に栽培や軽スポーツ、レクリエーションなどの集団活動を行いました。栽培では、花や野菜を育てる経験を通して命の大切さを学び、自分が世話をした植物が花開き、実を結ぶことで達成感を得ることができました。軽スポーツやレクリエーションを通して、挨拶や仲間への温かい言葉かけ、相談して物事を決めること、感情のコントロールなど、社会性を高めることができました。小集団の中で自分らしく過ごし、皆と楽しい気持ちを共有できた経験は、子どもの自信にも繋がったと思われます。

集団活動で心と体をほぐした後は、気持ちを切り替え、集中して学習に取り組みました。各々が持参した教材を用いて自学自習を行いました。タブレットPCを使ってドリル学習や調べ学習をしたり、在籍校の授業をオンラインで受講して、学校との繋がりをもったりすることもできました。

今年度は、小学生7名、中学生7名が白鳥教室を利用しました。

小学生が増加傾向にあり、今年度は特に低学年の子どもの登録や問い合わせが増えました。幅広い学年の子どもが同じ教室で集団生活を送ることに難しさもありますが、互いに協力し合って過ごすことができました。

今後も、保護者や在籍校との連携を密にし、一人一人の子どもに適した支援を進めていきたいと考えます。

【担当】教育研究所 新井聡美（記） 眞壁玲子 宇田川嘉一



ベランダで育てたアサガオのつるで作ったリース

8 教育情報資料及び教科書

(1) 教育情報資料について

教育研究所では今年度もこれまで同様に、区内各園・学校より、毎月の園学校だよりをはじめ各種行事プログラムや研究発表等に係るリーフレット、教育計画、記念誌等をいただいています。いただいた教育・保育情報は年度ごとにファイリングし、いつでも閲覧可能な状態を保っています。併せて、月刊や季刊等の教育雑誌や刊行物についても取り揃え常設していますので、必要に応じて各園・学校でご利用ください。

(2) 教科書展示会

令和2年6月2日から7月3日まで、千代田区教育委員会の命を受け、研究所内情報資料室にて教科書展示会を行いました。期間中は、新型コロナウイルス感染症拡大防止対策で毎日、使用する机やイス、図書等のアルコール消毒と換気を行いました。来室者のアンケート記載内容を集約すると、展示目的や会場、方法等については概ね良好の結果が出ています。さらに、会場運営に係る危機管理について教育委員会指導課と協議しながら、次回開催に備えたいと考えています。

(3) 教科書の保管

現在、区内小中学校及び中等教育学校で使用している教科書をはじめ、他社の発行する各種教科書やこれまで使用してきた各教科等の教科書を、年度ごとに整理して保管・展示しています。かつて扱った教材の探索や資料の収集など、教材研究の一環としてご活用くだされば幸いです。

【担当】指導課 林 文則 係長 田中慎太郎 主事 教育研究所 額賀 聡（記） 長田真理子

編集後記

今年度は、千代田区教育委員会の指導の下、緊急の対策を講じながら、各園・学校では全力を挙げて教育活動を推し進めてきました。その原動力になっている教員・職員の奮闘ぶりを、各年次研修や保育訪問時等の子どもの育ちを通して伝えたい、その一念で編集にあたった本号です。

なお、次年度の所報は発行時期と回数を変更する計画です。年1回の発行（第82号・2学期を予定）とし、その他に情報として「研究所だより」をお届けしようと考えています。